

2-1					
主題	ICT を活用した先進的な科学的介護の実践				
副題	根拠に基づいたケアで入居者様の QOL UP・職員の業務負担の軽減・コスト削減を目指して				
キーワード 1	ICT	キーワード 2	QOL	研究(実践)期間	9ヶ月

法人名・事業所名	社福) 暁会 特別養護老人ホーム フェニックス杉並
発表者(職種)	長嶋智(フロアリーダー)・鮫島真弓(フロアリーダー)
共同研究(実践)者	中田圭祐(介護課長)

電 話	03-5335-5100	F A X	03-5335-5101
-----	--------------	-------	--------------

事業所紹介	2021年11月に開設した新しい施設です。ICTを活用し、入居者様のQOL UP、科学的介護で根拠に基づいたケアを実施し、ケアの質の向上、職員の業務負担軽減等を行い、職員の定着率UP等、働きやすい環境を目指し、職員一丸となって取り組んでいます。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

今までの介護は、経験や職員の感覚的な部分でケアを行っていた。職員育成に関し、経験や感覚的な部分を伝えていることが多く、根拠を基に指導する場面は少なかった。ケアの質の向上、入居者様のQOL UPを行うためには、根拠を基にした指導、入居者様一人ひとりに適したケアを提供することが必要だと感じる。目的を持ってICTを導入し、その目的を職員が理解し活用することで、ケアの質の向上、入居者様のQOL UPに繋がると考え、当施設ではICT委員会を設置し、積極的に取り組んでいる。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

オムツセンサーを導入する目的は、①入居者様の排泄パターンを把握し、適切な排泄介助を行うことで、パッド類を使用せず、普通のパンツに戻す。②寝たきりに近い方の排泄リズム、尿量等を把握し適切に排泄介助を行い、入居者様の身体にかかる負担を軽減する。この2点を目的とし、4点の仮説を立てた。

1. 普通のパンツに戻す、またはパッドを使用しないことで「まだ自分にもできることがある」という気持ちを持ってもらい、普段の生活の中で意欲の向上に繋がるのではないかと。
2. 寝たきりに近い方の排泄介助は、定時での交換が多くなってしまい、尿漏れによる皮膚トラブルや、排泄介助に入ったが尿が出ていなかった等、入居者様の身体にかかる負担が大きい。センサーを使用することで、皮膚トラブルを含め、入居者様の身体にかかる負担を軽減でき、快適な生活に繋がるのではないかと。
3. データを基にケアを行うことで、職員育成の際に役立つ情報が得られる。また、ケアが見える化することで、目的を持ってケアに取り組み、ケアの質の向上に繋がるのではないかと。
4. パッドやオムツ類を無駄に使用することがなくなるため、コスト削減にもつながるのではないかと。

《3. 具体的な取り組みの内容》

ユニットを選定し、対象者を5名選定。①対象者は寝たきりに近く終日オムツを使用している方2名、

②日中トイレ誘導をしている方 3 名とした。センサー専用のパッドにオムツセンサーを設置、オムツ内の尿の様子をパソコン上で見える化し、センサーが収集したデータを基に排泄介助を行った。センサー使用前、使用中、取り外し後の排泄介助の様子を比較し、どのような効果があったか、入居者様の生活の変化、職員の排泄介助に対する意識の変化を追った。モニター期間を 1 ヶ月とし、センサーが収集したデータをグラフ化した。具体的な成果のポイントとしては、パッド類の使用枚数、普通のパンツに戻す、入居者様の皮膚状況の変化等とした。モニター終了後、成果が見られたため、導入することを決定し、現在は 8 ユニット、計 11 名の方に使用している。今後、使用する目的を明確にし、随時対象者を増やしていくこととしている。排泄トラブルや皮膚トラブルが多い方等、看護的にもデータが欲しいという要望もあり、看護とも連携して取り組んでいる。ランニングコストとしては、約 160 万円となっている。

《4. 取り組みの結果》

取り組みの結果として、①の入居者様 2 名に関しては、1 日の排泄介助回数は 6.7 回から 4.79 回へ減少し排泄介助時間に換算すると約 32.8 分減少。排泄介助回数は減少しているが、センサーのアラートをパッドの吸収量に対し 70% で設定しているため、尿による皮膚トラブルはなく、皮膚状態はセンサー使用前よりも、皮膚状態は良好。また、アラートを目安に排泄介助が行えることで、無駄に大きなパッドを使用することはなく、パッドにかかるコストの削減にも繋がった。②の入居者様に関しては、1 名は排泄パターンが把握できたため、普通のパンツに戻すことができ、日常生活でも笑顔や発言が増え、意欲の向上に繋がった。残りの 2 名に関しては、本人の訴えと排泄との整合性が取れたことで訴えに対し、本当に排泄なのか、違う訴えがあるのに「トイレ」というワードで何かを訴えているのかが分かり、適切なケアへと繋がった。排泄の見える化、データを基に介助を行うことで、職員の排泄に関する意識の向上、根拠に基づいたケアを実行することで、ケアの質の向上にも繋がっている。

《5. 考察、まとめ》

データを基に根拠を持ってケアすることで、自分たちのケアが間違っていないという自信に繋がる。職員育成において、経験や感覚も大切だが、そこに $+ \alpha$ としてデータやデータの見える化を行うことで、教わる側にもわかりやすく、根拠と共に伝えることができるため、ケアの質の向上に繋がると考える。また、排泄パターン把握や排泄介助によってかかる入居者様の身体への負担軽減等が行えることで、入居者様の QOL は向上すると考えられる。目的を持って ICT を活用することで、職員がやりがいを持ってケアをする環境、最先端の技術を使ってケアを行うことで様々なことに興味を持って取り組める環境等に繋がり、ケアの質の向上と共に職員定着にも繋がると考えられる。また、今回のオムツセンサーを目的別に活用することで、排泄物品にかかるコスト削減にも繋がると考えられる。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

センサー使用前、使用中、使用后とそれぞれデータ、グラフ化してもらい、そのデータを参考に行った。

《8. 提案と発信》

今後、介護を担う人材の確保は、どの事業所においても課題となってくると思われる。人材を確保する、定着させるためにも、ICT は積極的に活用し、事業者の一つのメリットとして導入することは必要だと思う。また、最低限の人数でも、ケアの質を落とさず、入居者様一人ひとりに寄り添い、生き生きと生活してもらうために、データを基にケアを行い、職員の業務負担軽減に繋げることも大切だと思う。そして何よりも入居者様が自分らしく、自信、意欲を持って、生き生きとした生活を送ってもらうために、ICT を積極的に活用してほしいと思う。